

南極OB会 会報

No. 3

発行 南極OB会
会長 川口貞男
編集 広報委員会

目 次

新“しらせ”命名・進水式挙行 1	皆の村山隊長 7
「宗谷」古希 2	村山雅美さんを偲ぶ 7
48次越冬、49次夏隊帰国 3	連載 部便り②（北海道支部） . . . 8
「しらせ」最終航海終える 3	連載 「観測最前線」②
帰国隊員らの歓迎会開催 3	南極オゾンホールの現状について . 11
2008年度	書評 「もう一つの南極史」 13
ミッドウインター祭への誘い 4	会員の広場
2007年度・会計速報 5	投稿記事 15
「ピースボート」南極に行く 5	会員の動向 16
村山雅美さんを偲ぶ（上）	広報委員会からのお知らせ 16

新“しらせ” 命名・進水式を挙行



平成20年4月16日 二代目“しらせ”進水の模様

平成20年4月16日12:05からユニバーサル造船・舞鶴事業所で次期砕氷艦の命名・進水式が行われた。

南極OB会有志（南極倶楽部にも声をかけ参加者を募集、ユニ造には南極OB会で進水式参列依頼）は、バスを一台チャーターして東京・鍛冶橋駐車場を15日夜に出発した。東名、北陸道を経由して16日早朝西舞鶴に到着、朝食後、しばしの休息を取り、ユニバーサル造船・舞鶴事業所に向かった。

命名・進水式は遅れ気味に進行したが、12:05から命名式が行われ、石破防衛大臣から「しらせ」と命名された。引き続き、進水式に移り、石破防衛大臣がマサカリで支綱を切断した。艦首に付けられたシャンパン、くす玉が割れ、岸壁では花火が打ち上げられ、「しらせ」は曳船に引き出され徐々に動き出

した。

二代目「しらせ」の誕生である。

16日の夜は近辺の南極OB会支部、白瀬中尉誕生の地「にかほ」市長等市関係者、西堀栄三郎探検の殿堂関係者と合同の懇親会を実施し、二代目「しらせ」の誕生を祝った。懇親会では今回のツアー最長老の松浦“ふじ”第二代艦長の発声で乾杯を行い、南極OB会本部を代表し小野延雄さんが挨拶、その後、井上秋田支部長、藤原山陽支部長、吉川山陰支部長、遠藤新潟副支部長、齋藤京都支部長代理、太田ノルウェー支部長の挨拶、報告が行なわれた。各々、再会を喜び、新しい交流関係を築くなど、今後の南極OB会の運営（本部と支部の運営）に大きな一歩を築くことが出来たものと確信している。

（久松 武宏）

「宗谷」古希祭

南極観測船「宗谷」の古希祭が、2月16日（土）午前11時から、約100名が参列して宗谷のヘリ甲板で行われた。祭祀は靖国神社により進められ、靖国神社権宮司 山口建史氏、進水式支綱切断者 由井幸子さん、特務艦「宗谷」初代艦長ご子息 山田健雄氏、南極観測船「宗谷」乗組員 三田安則氏、観測隊員 小野延雄氏、前国立極地研究所長 渡邊興亜氏、海上保安庁政策評価広報室長 中野雅彦氏、『奇跡の船 宗谷』執筆者 桜林美佐さん、日本海事科学振興財団（船の科学館）理事長 森田文憲氏が参列者を代表して玉串拝礼を行った。

「宗谷」は70年前、ソ連通商代表部より発注を受けた耐氷貨物船3隻のうちの1隻「ボロチャエツ」号として、昭和13（1938）年2月16日、長崎県の川南工業（株）香焼島造船所で進水した。進水式の支綱を切ったのは、川南豊作社長の令嬢で当時6歳の幸子さんであった。

国際情勢の緊迫化などでソ連には引き渡されず、「地領丸」と名づけられて貨物運送など

に当たっていたが、海軍に引き取られ特務艦「宗谷」となった。太平洋戦争中、常に最前線にいた「宗谷」は奇跡的に生き延び、戦後は引揚船で活躍、昭和24年末に今度は海上保安庁の所属となった。同庁では灯台部に配属され灯台補給船として使われた。

昭和30年に南極観測の計画が持ち上がり、船をどうするかは大きな問題だったが、耐氷構造の「宗谷」に白羽の矢が立った。戦中戦後の過酷な運命の中を生き延びてきた「宗谷」は昭和30年12月、灯台部所属の灯台補給船から第3管区海上保安本部所属の巡視船に配置換えとなり、南極への第1歩を踏み出したのであった。

この日、式典後の講演会では、桜林さんが幸子さんにインタビューして宗谷にまつわる思い出を聞き、創作『歌で綴る宗谷物語』を朗読した。その後の食事会では、古希を祝ってキングレコードから発売される井上武志作詞・羽野誠司作曲・山岡竜歌唱の『宗谷よ』が山岡さんによって熱唱された。

宗谷は40年の現役後、船の科学館に展示されて30年が経った今も、繋留保存船として船舶検査を受け続けている長寿船である。

（小野延雄記）

48次越冬、 49次夏隊帰国

南極観測50周年の節目に、昭和基地で越冬観測をしていた第48次越冬隊35名と、

2007年暮れから今年にかけて基地で活躍した第49次夏隊20名と同行者4名は、3月27日空路帰国した。

また空路南極に派遣され、セールロンダーネ山地で地学調査などを実施した第49次夏隊10名と同行者1名は2月に一足早く帰国している。

「しらせ」最終航海 終える

最後の南極航海を終えた観測船「しらせ」は、4月12日朝東京港に帰国した。

「しらせ」は「宗谷」「ふじ」に次ぐ第3代目の観測船として、1983年に就航、以来

25年間にわたり南極観測の支援活動に従事してきた。帰国後は海上自衛隊横須賀総監部に戻り、今年8月に引退する。

その後の「しらせ」を保存したいと名乗り出ているのは北海道稚内市だが、払い下げや改修に多額の費用がかかることから話は進んでいない。4月初めから民間の引き取り手も募集している。

帰国隊員らの歓迎会開催

相次いで帰国した第48次越冬隊、第49次夏隊の隊員および同行者、観測船「しらせ」乗員幹部らの帰国歓迎会が、国立極地研究所主催で4月14日午後6時半から東京・元赤坂の明治記念館「富士の間」で開催された。

開会の挨拶に立った藤井理行極地研所長は、南極観測50周年および国際極年の年に当たり、しっかりと観測事業を遂行し無事帰国した隊員や乗組員、そしてそれを支えた留守家族の労をねぎらった。

ついで来賓の松浪健四郎文部科学副大臣、医師・登山家の今井通子氏が来賓挨拶、成果を挙げての無事帰国をたたえた。また祝電は堂本暁子千葉県知事、昭和基地で越冬中の第49次牛尾収輝越冬隊長からのものが披露された。

南極OB会副会長・東大名誉教授の国分征氏の乾杯挨拶で懇談に移った。宴たけなわで第48次越冬隊全員が壇上に上がり、宮岡宏越冬隊長が観測と設営分野の成果を報告、ついで第49次夏隊・同行者が壇上に上がり、伊村智隊長が成果を報告した。富岡越冬隊長は、90種以上の観測の内容と、基地燃料パイプライン約1キロの使用開始など設営分野の成果を報告した。その最後に、1957年

第1次隊がオングル島に上陸、日章旗を掲揚、昭和基地と命名した歴史的な地点が、その後半世紀にわたって正確な地点が不明なままに過ぎてきていたが、48次隊がその地点を突き止め、旗竿を雪の中から発見したと報告し、会場から拍手が起きた。

この後、48、49次などに関係し、多年にわたり活躍された個人と団体に表彰が行われた。

「個人の部」

半田 英男（はんだ ひでお）

39冬、43冬、48冬

加藤 凡典（かとう ひろのり）

31冬、44冬、48冬

小山内康人（おさない やすひと）

28夏、31夏、39夏、49夏

「団体の部」

いすゞ自動車株式会社

47冬、48夏、48冬、49夏

NECネットエスアイ株式会社

46冬、47冬、48冬

KDDI株式会社

46冬、47冬、48冬

更に今回の48次、49次隊全員に首から提げるメダルが贈られた。

2008年ミッドウインター祭への誘い

目に青葉が眩しい季節となりました。
皆様におかれましては、益々ご健勝、ご活躍
のことと存じます。

さて、南極観測隊も48次越冬隊、49次
夏隊も既に帰国、早くも50次隊が準備に忙
しい日々です。また、次期観測船（しらせ）
も4月16日に進水式が行われ、順調に完成

に向かっています。

さて、今年も「南極OB会」主催のミッド
ウインター祭を下記の要領で開催いたします。

今回は小野延雄さん、山内恭さんにご講演
いただくことになっております。ミッドウイ
ンター大いに楽しみましょう。皆様、お誘い
の上、是非ご参集下さいませよう、ご案内申
し上げます。

記

1. 日 時 ; 平成20年 6月21日(土) 17時40分より受付
場 所 ; アルカディア市ヶ谷(富士の間) アクセスは同封地図参照
千代田区九段北4-2-25 TEL 03-3261-9921
会 費 ¥8,000円
2. ミッドウインター祭
第1部 IPY講演会 (18:00~19:10)
小野延雄 『極地探検の歴史とIPY・IGY』
山内 恭 『国際極年2007-2008と南極・北極をめぐる国際情勢』
第2部 懇 親 会 (19:20~21:00)

講演要旨

小野延雄 講師 『極地探検の歴史と
IPY・IGY』

来年はペアリーとハンセンが北極点に到達
(1909)して100年になる。2年後ア
ムンゼンが南極点に立った。それ以前は、南
極北極は想像の世界であり、未知の大陸を探
す探検の時代であった。ワイプレヒトが観測
しようと呼びかけて、それがIPY(国際極
年 1882-83)として実った時、彼はす
でに故人であった。50年後がIPY2
(1932-33)、その25年後が日本南極
地域観測隊誕生の契機となったIGY(19
57-58)である。

山内 恭 講師 『国際極年2007-
2008と南極・北極をめぐる国際情勢』

IGYから50年、今、IPY2007-
2008を迎えた。IGYの熱狂はないもの
の、高度に発達した科学的研究・観測が南極・
北極で実施されている。地球温暖化等、地球
環境問題を前に、極域での観測の役割は極め
て高く、その成果が期待されている。IGY
南極観測の時は、わが国を除くと全て戦勝
国・白人の国であったが、今は多くの国が参
加し、アジアからも南極・北極へ活発な観測
活動が進められている。

出席希望手続き



ミッドウインター祭へのご出席希望の方は、氏名をメール又はFAXもしくは葉書で、
6月10日(木)迄に、南極OB会事務局までご連絡下さい。

なお、南極OB会事務局は

所在地 〒101-0061 東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301

電話&Fax : 03-5210-2252

E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

です。

(白壁弘保記)

2007年度・会計速報

会計担当：増田博

1、2007年度収支決算は、別途、総会報告とするが、初年度&通信費等への理解促進などの観点から、とりあえず2007年度会計の概況を速報的に報告する。

2、2007年度は、

収入・・・2,541千円

支出・・・1,081千円

であった。総会で承認された予算内で活動できたものと思うが、①50周年記念事業委員

会の活動との関係、②実質6か月の活動、等やや特別な状況にあった年度と言える。

なお、活動項目別の収支状況・分析などは、監事の監査終了後に報告することとしたい。

3、年間通しての活動になる2008年度の予算は、会則運用規定第7条にもとづき執行していくことになるが、現段階でIT関係など会の運営基盤整備に力を注いでいく必要があると思われる。

「ピースボート」南極に行く

7次、47次 柴田 鉄治（写真も）



ピースボート全容

青年たちが船で世界各国を訪ね、交流を深める「ピースボート」の活動が25周年を迎え、それを記念して、今年、南半球世界一周の旅と初めての南極訪問の航海が企画された。この南極航海に参加して船内で南極についての講演をやってくれないか、という依頼があり、南極と聞けば血が騒ぐ私は、二つ返事で引き受けた。以下は、今年3月上旬の2週間、

初めて南極をいく「ピースボート」同乗記である。

船は、パナマ船籍の「トパーズ号」 3万1500トン。約1000人の日本人乗客を乗せて1月初め、横浜港を出航、シンガポールを皮切りにアフリカ、南米、ニュージーランド、オーストラリアと18カ所に寄港しながら南半球を一周する4カ月の旅だ。

このうち初の南極航海は、2月29日にアルゼンチンのブエノスアイレスを出航して、3月15日にチリのプンタアレナスに入港するまでの2週間余、南米最南端のフォークランド(英)、ウスアイア(アルゼンチン)の2寄港地を含む南極半島までの航海である。

日本から南米南端まで往復する空路の長さにも驚いたが、ブエノスアイレスで乗船して最もびっくりしたことは、「青年の船」だと思っていたピースボートが、「老人の船」だったことだ。乗客の平均年齢は64歳と聞いて、思わず目を白黒させてしまった。

しかし、よく考えてみれば、それも無理はない。豪華客船の旅のなかでは、格安のほうとはいえ、相当な「費用」がかかるうえ、4カ月の「休暇」が必要なのだ。青年たちが気楽に応募できるはずはない。

ちょうど「団塊の世代」が定年を迎えたため、定年記念の旅にこの世界一周を選んだ人が多かったのだろう。長年の「内助の功」に報いるため、と奥様同伴の夫婦連れの姿が目立った。

とはいっても、ピースボートはやはり「青年の船」である。船内の行事やさまざまな催しは、すべて青年たちが取り仕切っている。乗客の中の若い人たちも、ボランティアとして参加し、手伝っている。

ピースボートの最大の特徴は、立派な講師団が乗っていて、随時、さまざまな講義や講演会が開かれることだ。ピースボートでは、この講師団の人たちを「水先案内人」と呼んでいる。

私も水先案内人の一人として乗船したわけだが、水先案内人は寄港地ごとに入れ替わっており、私が乗った南米から南極航海の間に一緒にいた人は、軍事評論家の前田哲男氏、ジャーナリストの鎌田慧氏、南米特派員として活躍した元共同通信記者の伊高浩昭氏など。私も各講師の話をお聴かせいただいたが、実に中身の濃い、役に立つ講義だった。

たとえば、フォークランドに寄港して、のどかな南の島の風景とはおよそ似つかわしくない「地雷原」の姿を目の当たりにしたあと、30年前のあのフォークランド戦争とはそもそも何だったのかを詳しく学ぶ、といった具合なのである。

私の南極講座は計5回。第7次観測隊、第47次観測隊に同行したときの写真をスライドに映しながら、昭和基地の様子や観測の内

容などを紹介し、南極は地球環境のバロメーターであり、「地球の病気は先ず南極に現れる」という言葉があるように、地球環境にとって南極観測がいかに重要かを説いた。

そのうえで、さらに南極条約を説明して、南極は人類の共有財産ともいふべき「国境のない大陸」であり、一切の軍事利用を禁止して、科学観測の自由と国際協力をうたった「人類の理想を先取りした平和の地」であることを示した。

そして、各国が自国の「国益」ばかりを主張していたら、世界平和も地球環境も守れない、これからは「愛国心ではなく愛地球心」でなくてはならないと説き、「世界中を南極にしよう」「南極を教育に」と私の持論を展開した。

ピースボート初の南極航海は、大揺れのドレーク海峡を超えて南極半島に接近、乗客の一部は小さな船に乗り換えて各国の基地やペンギンの生息地を訪ねるツアーに参加したが、大半の人たちは船から氷山やペンギンの姿を眺めて、大喜びだった。



ピースボート(手前から)小型船に乗り換え南極半島へ上陸する一部の乗客たち

昨年、南極を訪れた観光客が2万人を超えたというニュースが報じられた。これからはもっともっと増えていくに違いない。環境を心配して観光客を歓迎しない空気が一部にあるようだが、私はもっと多くの人たちが訪ねたらいいと思っている。国境のない世界を実体験する人たちが増えれば、世界平和と地球環境の保全に役立つと思うからだ。

ピースボートの南極訪問がこれからも続くことを期待したい。



村山雅美さんを偲ぶ (上)

皆の村山隊長

川崎 巖

鳥居先生が弔辞で述べられた村山さんの南極での功績の最も大きいものは、宗谷後の南極再開への活躍と極点旅行の2つではなかったかと陳べられていましたが、この両時期に私は村山隊長に仕えていました。

村山隊長の最も心身ともに充実していたこの時期、私は5次隊の越冬で230日、9次隊では、南極点往復を含めて、200日余を氷原での旅と生活を共にさせていただきました。その経験の限りで申しますと、隊長に接した隊員の一人一人が自分一人の隊長という想いがあったかと思います。

縦の組織の隊長というより、一人一人の隊員とパラに心の通った隊長であったかと思えます。それが全員に私の隊長という意識を持たせているのだと思います。どうしてそのような気分にさせていたのか不思議な魅力を持った隊長でした。決して強面の命令があるわけではなく、打ち合わせの席上でも「こうしませんか」と短い言葉が絶対的な指示として伝わりました。この指示は相談されたようであり、尚且此方にも責任を負わされたような指示でありました。そしてこれは絶対的な信頼のおける命令でした。経験の裏付けがあり、十分な準備と検討がされた後の指示ですから重みがありました。

奔放的な教育と家庭の環境で成長され中学、高校、大学時代を自由に山登り一筋に過ごしその延長線が、逆に規律に縛られる海軍生活に憧れをもたれていたのではないかと思います。それに日本山岳会のマナスル遠征で一層の磨きが掛り、規律や制約の中での自由をどう楽しむかに関心があったようです。観測船内や基地生活でも同じでした。手術台といって玉突き台を基地に持ち込み、バー9を開店しては金を払って酒を飲む。狭いテントや雪上車の中に閉じ込められた時の備品として、聖書や辞書ではなく、電話帳や昭和歌謡曲集を準備させたり、酒が無いと言えば薬用のアルコールを出させたり、遊び心と茶目っ気が常にありました。制約され

た世界でその間隙をぬって遊ぶのが大好きでした。



水汲池でのスケート大会 (1968.3.3)
写真提供 吉田光雄 (9次冬・地球物理)

綿密なデータと豊富な経験の上で、十分な準備をした後は、ケセラ、セラ なるようになるという楽天的な雰囲気や隊内にもたらしていた隊長でした。

私の南極も終わりです。今隊長の魂は何処を彷徨っているのか、私は夜半酒に酔って隊長との旅の記録を見ながら氷原の夢の中を彷徨っています。隊長に出会わなければ、即物的な人間として、何処かの山で遭難するか、単なる会社人間になっていたかと思えます。人生をエンジョイすること、人間としてのバランス感覚を植え付けられたのが村山隊長でした。楽しい沢山の思い出をそして人生を有難うございました。これからはご冥福を祈りながら献杯を続けます。

(5、9次冬・機械)

50周年目前に逝った村山さん

渡辺清規

私は第3次隊から第6次隊の南極輸送に参

加し、宗谷、昭和基地間の空輸に従事したこともあって、村山さんと接した回数も時間も他の宗谷乗組員より多かったと思う。

第3次観測では、第1便で村山越冬隊長以下を昭和基地に空輸し、タロ、ジロとの再会という劇的場面に遭い、感激を共にした。また、3次観測隊では、輸送期間中、天候に恵まれず、私は10日間も昭和基地に留め置かれ、強烈なブリザードを体験したことがあった。そんな或る日、風の唸り声で目を覚まし外に出て見ると、テント村のテントが倒され、雨を交えた地吹雪の中、村山さんと芳野さんが必死に倒れたテントを押さえていた。早速手伝って飛ばないようにすることが出来たのだが、村山さんは、臨時宿泊の我々を基地建物の中に宿泊させ、越冬隊長である自分はテントの中で起居していたのだろうか。それとも、強い風を心配しての見回り中だったのだろうか。

また、ある晩、猛烈な風が吹き募り、ヘリコプターが心配になった私は、岩陰にシフトして荒天準備をしてある機を見回り、機内に入って様子を見てみると、村山さんがドアを開けて「大丈夫か」と言いながら入ってきた。

「大丈夫」と答え、機内に積んであった密柑缶を開け、暖房を入れ、しばらく雑談をしている間に大丈夫と思っただけで、村山さんは帰って行った。次の夜も、私が機内に泊まることにしていると、平山隊員と一緒に泊まってくれることになった。これらは皆、村山さんの心遣いだった。2機の搭乗員4名が基地泊まりとなった時も、自分達は不自由してでも、我々を基地施設内に泊めてくれた。こんな時、食堂の張り紙に曰く「今宵のお宿は静

かな昭和荘へ、空港より徒歩2分、☎1919、すべて、バス、トイレなし」と。これが、村山さんを中心とする昭和基地の雰囲気だった。

また、何時だったか、基地で入浴したことがある。風呂場の入り口には「女湯」と書いた暖簾が下がっていた。風呂と言っても、発電機を冷却して熱くなった湯をドラム缶に溜めただけの代物であったが、何かしら楽しい気持ちにさせられたものだった。(一部省略)

第6次終了後、海上保安庁が南極観測の輸送業者から手を引く意向であることを知った村山さんは、観測の継続を強く訴え奔走した。その努力が報いられ、大きな力となって南極観測事業は再開、継続され、次世代に受け継がれて、今年、昭和基地開設50周年を迎えた。

嗚呼、その記念すべき日を数日後に控え、村山さんはその生涯を閉じた。しかし、南極観測に賭けられた村山さんの志は、これからも脈々と後世に受け継がれて行くことになった。以て瞑すべし。私は、初めて村山さんに接したとき、それまで接して来た公務員の人達とはカテゴリーを異にする人種であることを感じた。まるで雰囲気が違う。他人を引き付けるオーラのようなものが身邊に漂っているのだった。鋭い観察眼と緩急、軽重の判断力、素早く強烈な行動力の外に、村山さんが素知らぬ風に口を衝いて出る軽口やユーモアには春の麗らかさ、夏の涼風の爽やかさがあつた。偉人ならずとも、異人であつたと懐かしく面影を偲んでいる。合掌。

(3～6次宗谷・航空)



連載 支部便り② (北海道支部)

支部の概要

平成20年3月末現在、南極OB会北海道支部の登録会員は110名を数える。内8名は道外にいますので、実質は102名。その半数以上、58名が札幌在住会員で、小樽、江別、千歳などにいる6会員を加えると会員の

63%が比較的狭い道央圏に集中している。次に多いのは北見市の8名、そして函館市7名、稚内市5名、旭川市と釧路市に各4名、室蘭市の3名と続く。支部の中核は札幌に置かれているが、南極に縁が深く、昔から活発に活動している稚内地区と会員の多い北見地区にそれぞれ道北分会、道東分会を置いて活

動している。

南極OB会北海道支部は先の南極観測50周年記念事業の実施を当面の目的として設立された。記念行事を手空きの会員が協力して行ったことによって、同じ隊次でしか繋がっていなかった北海道内の南極OBが隊次を超えて繋がり、互いに連絡できる集団へと組織化された。この行事は、幸いマスコミの注目を集めたため世間に南極OB会道支部の存在が広く知れ渡ることとなった。行事の準備段階からホームページを立ち上げ、南極観測に係わる情報を発信すると共に、会員への情報発信の場として機能させた。会員相互の連絡はもっぱらメールを使い、集会ごとに必要経費を参加者が支払うことで会費の徴収はしていない。

定番の活動としては、南極に出発する隊員の壮行会を開き、適当な場所で南極での任務を話して頂いた後、居酒屋に座を移して一杯やっている。隊員帰国後の4月か5月に総会を開くことにしている。総会の前後に帰国隊員の土産話を、南極の映像を堪能しつつ拝聴し、総会後は帰国歓迎会と称して杯を傾けている。

南極OB会北海道支部設立前史

南極観測を始めるに当たって、南極探検に使える犬橇チームの編成を目指すこととなり、日本で一番寒い北海道がその任に当たった。道内各地から樺太犬が集められ訓練が行われた。その訓練地が北海道最北端の地である稚内であった。訓練所の開設や訓練に稚内市と市民の支援があったと聞く。極寒の南極の冬を生き抜いた奇跡の樺太犬として世界中に感動を与えた有名なタロとジロの生地でもある。このように昔から南極とは浅からぬ縁で結ばれていることから、毎年「みなと南極まつり」が開催されるなど、稚内市民には南極観測に特段の思い入れがある。一昨年(H18)の南極観測50周年記念事業の一環として、人口4万人の街で開催された講演会に聴衆100人を集めて気を吐いた。人口190万人の札幌なら4700人集めた勘定になる。稚内地区には以前から南極OBが複数名在住しており、稚内市青少年科学館の南極関連の資料の充実や南極関係のイベントに手を貸すなど、最近設立された「南極OB会道支部」以前から既に稚内版の「南極OB会」が活動し

ていた。いまの道支部はこのような活動の延長線上にある。

南極OB会北海道支部の設立

我国の南極観測が50年の節目を迎える記念に、何かやろうではないかとの村山雅美初代OB会会長からの提案に多くのOBが賛同し、平成16年11月「南極OB会」が設立された。長く継続されてきた南極観測によって、今や2000余名もの南極OBが全国に散っている。だから、記念行事は全国的に展開すべきであり、地方毎に支部を設立して南極OBを組織化することが急がれた。多くの隊次に亘って人脈のある元極地研究所所長の渡辺興亜氏が中心となって全国の南極OBに働きかけた中に北海道もあった。平成17年6月北海道大学低温科学研究所に南極OBが集まり、北海道支部設立の準備会合が開かれ、支部長や幹事の候補者を決め、講演会をやることにして講師の候補もあげられた。その後平成17年11月25日南極OB会北海道支部の第一回総会が北海道大学百年記念館で開かれ、安藤久男支部長(10次越冬・設営)と若干の幹事を決めて、ここに南極OB会北海道支部は呱呱の声をあげた。総会には第5次隊から第47次隊までの老若幅広い層が参集し、今後のOB会道支部の運営や50周年記念事業のことなどが話し合われた。総会後47次越冬隊に参加する隊員(澤柿敦伸)の壮行会を開き親睦を深めた。

南極観測50周年記念事業

南極OB会北海道支部主催の「南極観測50周年記念行事」は、平成18年10月21日開催の稚内での講演会を皮切りに、11月26日には札幌で、12月19日の北見における講演会へと続き、翌平成19年1月26日から31日に亘って室蘭市青少年科学館で開催された南極展で幕を閉じた。ここではその中核をなす札幌で開催された行事について、どんなものであったか、その雰囲気をお伝えする。

札幌における記念事業実施のため初会合を開いたのは支部設立翌年の平成18年2月10日であった。北海道大学百年記念館に12名の会員が集まり、記念事業の大枠が話し合われた。いま振り返るとほとんどこの大枠通りに事が進んだ。この席で「南極観測

50周年記念事業北海道支部委員会」を組織することに決し、当面は出席者全員が委員となって役割分担を決め、準備に取りかかった。

その後、委員会は新手の委員を加えつつ4月21日、9月12日、11月2日と回を重ね、開催場所や記念行事の内容が次々と具体化されていった。開催日が近づくにつれ、委員以外の南極OBに加えて、OBの家族や職場の友人、知人など多くの方々の応援もあって、滞りなく準備が整えられ当日を迎えた。

なお、記念行事には、次代を担う子供たちの心に、南極観測や雪と氷の世界を刻むべく、(社)日本雪氷学会北海道支部の共催を得て子供達を対象とした雪や氷を使った実験や体験実習も取り入れた。

1) 一般向け行事

平成18年11月26日(日)12:00から17:00の5時間に亘って北海道大学学術交流会館玄関ホールと小講堂を舞台に、約40名の南極OBらの手で繰り広げられた記念行事は、幸い、来場者1200名を超える盛況となった。

展示の目玉は深層コアであった。6千年前と21万年前の空気を閉じこめた二本の氷床コアは多くの市民の好奇心を大いに刺激し、終始黒山の人だかりが絶えず、説明に当たった北大低温研のスタッフに全く休む暇を与えなかった。二番人気は北海道大学植物園の博物館にあって門外不出を特別に借用し、玄関ホール脇に展示したタロの剥製(写真)であった。タロの前では記念写真を撮る人々やタロとジロの物語を話して聞かせる親子の姿があった。南極やまと山脈付近で発見された人頭大の石隕石と鉄隕石の展示、中でも自由に触って構わない鉄隕石がこれまた大人気で、子供だけでなく沢山の大人も興味津々この宇宙からの賓客に触れて感動していた。極地研から借用し展示した沢山のパネルには南極OBが傍らに付いて説明につとめた。展示場の一角に置いたインターネット経由の昭和基地のライブ映像コーナーやエンドレスで流した南極の映画は意外に人気を集め、当初用意した椅子では足りずスペースの許す限りの椅子を追加しなくてはならなかった。アマチュア無線の公開運用には多くの見学者が訪れ、札幌市内はもとより九州に到る総数202局との交信実績を残した。13項目に亘る南極

の氷を使った実験や南極隊員用防寒着の試着には、子供に引っ張られたお母さんやお父さんも多数参加し、人だかりのため何をやっているのか俄にはわからないほど混雑を極めた。収容定員200名強の小講堂で開催された講演会と映画「南極の詩」の上映は立ち見が出る盛況で、急遽運び入れた折りたたみ椅子30数脚も足りないほどであった。



玄関脇でタロがお出迎え(岸田浩輝会員撮影)

会場には多くのテレビ局のカメラが入り、新聞記者による取材もあって、当日夕方から翌日にかけて「南極観測50周年記念行事」の様子が報じられた。

2) 記念パーティー

「南極観測50周年記念祝賀パーティー」は記念行事当日の18:00から20:00まで会場を近くの北海道大学百年記念館大会議室に移し、南極OBとそのご家族や友人も含む60名の参加を得て開催された。調理隊員が百年記念館の食堂「きやら亭」厨房を借り切って供してくれた南極ゆかりの料理の数々がパーティーを大いに盛り上げた。時間の制約のため、第1次隊から順に各隊次の隊員が司会者によって紹介されるに止まり、各自がスピーチ出来なかったのが残念であった。途中、映画「南極50年史」が上映され、南極にしばし思いを馳せる一時が持たれた。

参集した南極OBの多くは隊次が違うため初めて出会う人々であったが、南極・昭和基地という共通の場で人生の一時を過ごし、同じような経験をしてきた者同士の親近感が通底していたためであろう、南極観測50周年を寿ぐ記念のパーティーは和やかな雰囲気

うちに散会となった。

その後の活動

50周年記念行事翌年の平成19年5月18日、第2回総会が北大学術交流会館で開催された。どんな組織でも役員が固定化すると活力を失う。多様な人材に首をつっこんでもらうことが重要で、組織創立初期から適宜入れ替える癖をつけておくことが望ましい。人材に限りがあるが、順繰りに回して、いなければ同じ人がまた戻ればいいのである。そこで役員任期を定めた支部会則を制定し、役員の改選を行い、会長山崎道夫（9次、20次越冬・気象）ほか稚内と北見分会も含む幹事、監事、顧問13名の役員が新たに支部の運営を担うこととなった。総会に併せて、47次越冬からの帰国隊員（斉藤健、澤柿敦伸）から土産話を披露願った。総会后、48次夏隊員（新堀邦夫、館山一孝、星野保）も含む帰国隊員全員の帰国歓迎会が開催された。講演会には約30名の、総会には23名の参加を得た。

平成19年10月27日49次隊に参加する3隊員（阿部幹雄、榎本浩之、杉山慎）の壮行会が開かれた。北大クラーク会館で南極における任務について語っていただき、その後場所を変えて一杯呑みながら歓談した。稚内や室蘭からの参加もあり、講演には21名、

懇親会には23名が参集する盛況であった。メールで連絡可能な会員のざっと4人に1人が集まったことになる。

砕氷艦しらせの稚内への誘致

砕氷艦しらせが49次南極行動を最後に引退する。稚内市は稚内地区在住の南極OBの協力のもと、これを引き取り科学館などに活用しつつ永久保存することを構想した。活発な誘致活動に乗り出し、文科科学省、防衛省、日本極地研究振興会、日本財団に陳情要請を行う傍ら、本年（平成20年）1月には南極OB会本部や地元代議士の武部勤衆議事務所支援依頼を行うなど鋭意努力が続けられている。北海道支部としてもこの構想の実現を望みたい。なお、しらせ誘致キャンペーンについては以下のサイトを参考にされたい。

<http://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/section.main/kagaku.sinkou/sirasetop.htm>

以上、北海道支部のこれまでの動きを記録に留めておきたいと考え、時間順に記述した。さらなる情報は是非北海道支部のホームページ <http://j45.sakura.ne.jp/jare-north/> を訪問してご覧になって頂きたい。

（南極OB会北海道支部幹事長 山田知充（12次、39次越冬・雪氷））



連載「観測最前線」②

南極オゾンホール の現状について

中島浩一（第47次越冬隊・定常気象観測部門、気象庁）

定常気象観測部門では、南極昭和基地において地上気象観測、高層気象観測、特殊ゾンデ観測、オゾン全量・反転観測、地上オゾン濃度観測、地上日射・放射観測などの観測を継続的に実施し、均質で精度のよい観測資料を蓄積するとともに、国際的なネットワーク観測の一員として活動している。

定常気象観測の項目の中から、ここでは最

近の南極のオゾンホール の状況について紹介したい。

1980年代初め、春季の昭和基地上空のオゾン全量（※1）が、それまでと比較すると著しく少なくなっていることが日本の南極観測隊により発見された。これはのちにオゾンホールと呼ばれるようになった現象を観測したものである。オゾンホールは南極上空のオゾ

ン量が極端に少なくなる現象で、オゾン層に穴の開いたような状態であることから名づけられた。南半球の冬季から春季にあたる8月から9月ごろに発生発達し、11月から12

月ごろに消滅するという季節変化をしている。オゾンホールが現れる前の1979年と、昨年2007年の10月の南半球のオゾン全量の分布を図1に示す。

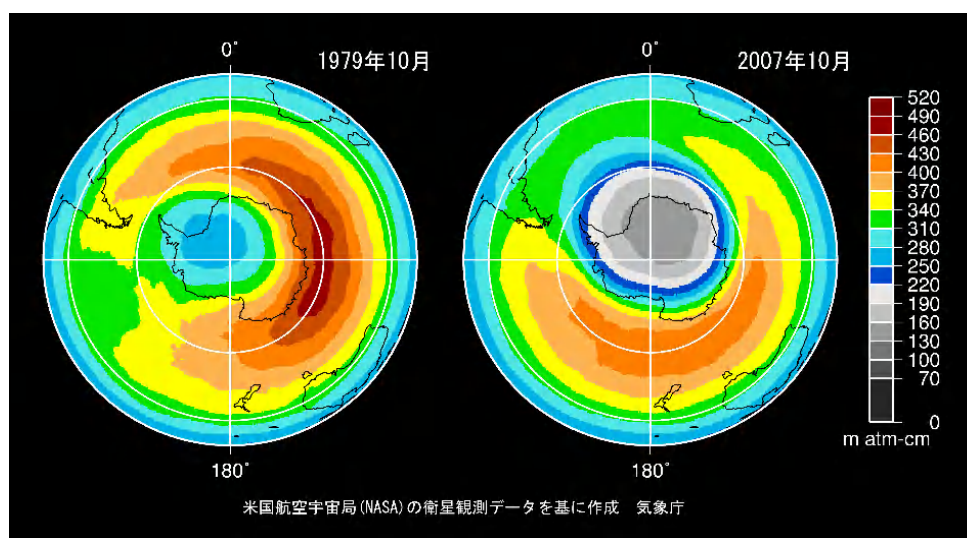


図1. 南極域のオゾンホールが現れる前の1979年と2007年それぞれの10月の平均オゾン全量の南半球分布。220m atm-cm以下の領域がオゾンホール。米国航空宇宙局(NASA)提供の衛星データをもとに気象庁が作成。

次に、オゾンホール面積(※2)の年最大値の推移を図2に示す。

これをみると、南極オゾンホールの規模は1980年代から1990年代にかけて拡大し、その後も大きい状態が続いていることがわかる。

続いて、昭和基地での観測について述べたい。

昭和基地でのオゾン全量観測は、ドブソンオゾン分光光度計という観測装置を用いて、悪天の日および極夜の時期を除き、毎日行っている。また、今回は詳しく触れないが、ほぼ週1回の割合で、オゾンの鉛直分布を観測するためのオゾンゾンデを飛揚している。第48次隊による昭和基地での最新の観測結果を図3に示す。8月から11月頃にかけてオゾン全量は減少し、10月5日に2007

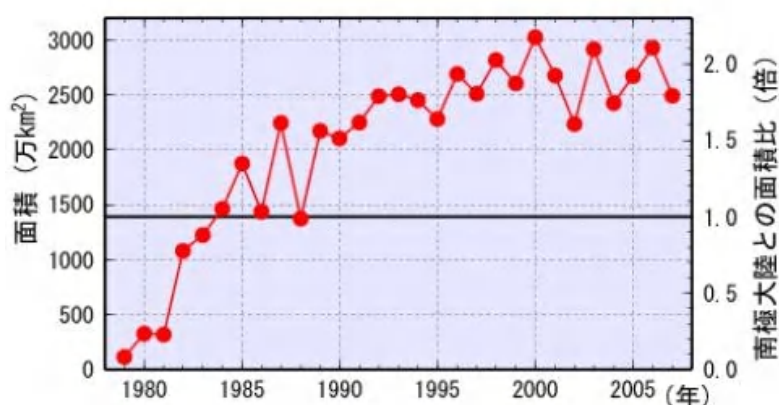


図2. オゾンホール面積の年最大値の推移
1979年以降の年最大値の経年変化。横線は南極大陸の面積を示す。米国航空宇宙局(NASA)提供のTOMS(ver.8)およびOMIデータをもとに気象庁が作成。

年の最小値である138 m atm-cm(暫定値)を記録した。ちなみに、これまでの最小値は2006年10月17日の114 m atm-cmである。1987年のモントリオール議定書以降、オゾン層破壊物質の生産規制等の世界的な取り組みが始まった。近年、オゾンホールの拡大傾向は見られなくなっているが、世界気象機関(WMO)/国連環境計画(UNEP)が取りまとめた「オゾン層破壊の科学アセスメント：2006」によると、今後も引き続き数十年間は現れると予想されている。定常気象観測部門では、引き続き観測を行い、質の良いデータの取

得に取り組んでいきたい。

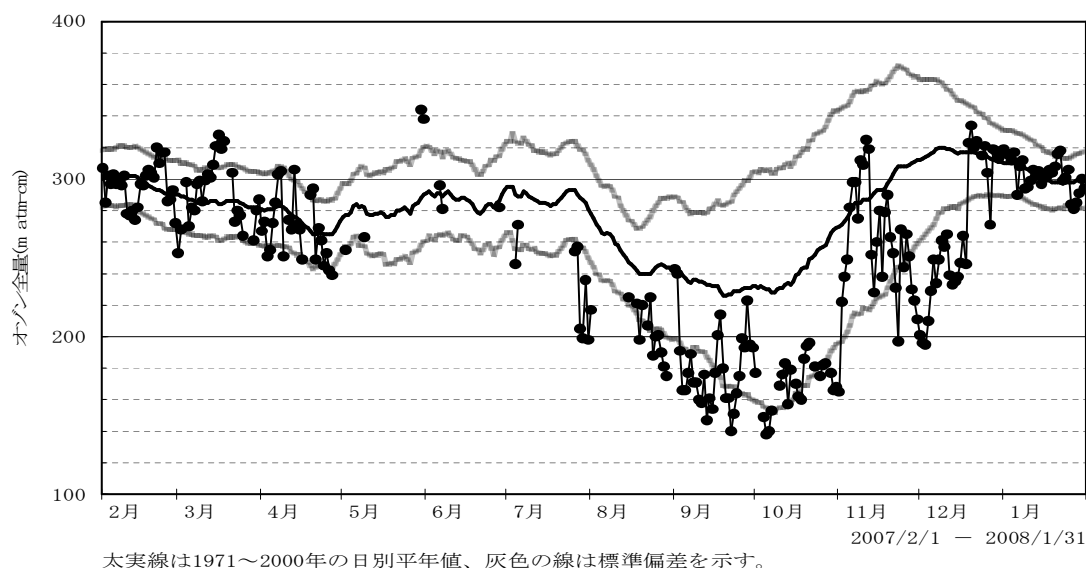


図 3. オゾン全量日代表値の年変化(2007 年 2 月～2008 年 1 月、値は暫定値)

なお、南極オゾンホール状況等についてより詳しくお知りになりたい方は、気象庁の下記ホームページをご参照ください。

http://www.data.kishou.go.jp/obs-env/ozonehp/diag_o3uv.html
http://www.data.kishou.go.jp/obs-env/ozonehp/info_ozone.html

注

※1 オゾン全量

地表から大気圏上端までの気柱に含まれるすべてのオゾンを積算した量。仮に大気中のオゾンをす

べて 1 気圧、0℃として地表に集めた時にオゾンだけからなる層の厚みをセンチメートル単位で測り、この数値を 1000 倍したものを、m atm-cm (ミリアトムセンチメートル) の単位で表す。地球全体の平均的なオゾン全量は約 300m atm-cm で、これは地表で約 3mm の厚さに相当する。

※2 オゾンホール面積

気象庁ではオゾンホールの面積を、「南緯 45 度以南におけるオゾン全量が 220m atm-cm 以下の領域の面積」と定義し、米国航空宇宙局(NASA)提供の日別の衛星データをもとに算出している(オゾンホールの規模を定量的に表現するための世界的に統一された尺度はない)。



書評 「もう一つの南極史」

小玉正弘著、近代文芸社 2007 年 9 月刊

我が国の南極観測は、一昨年度、50 周年を迎えた。文部科学省からは、その正史となる「南極観測五十年史」が昨年発行された。また、50 周年を機に、南極OB会編の本を初めいくつもの出版があり、その歴史がさまざまに語られ評価された。小玉正弘氏の著となる「もう一つの南極史」は、表題が示すよ

うに、これまであまり知られていなかった事実、少なくとも南極の長い歴史からすると若輩者の小生は知らなかった多くの事実が著者の深い想いととも語られており、南極OB諸氏はもとより多くの人に一読をお勧めしたい本である。

この著書全体を貫くのは、宇宙線およびオ

オーロラ研究における著者のパイオニア精神である。地球磁場の緯度効果を探る宇宙線船上観測、オーロラ X 線観測、南極—アイスランド地磁気共役点観測、ポーラーパトロール気球観測など、著者は、我が国あるいは世界で先駆けとなるさまざまな観測を果敢に手がけ、現在の我が国の高度な宙空系研究観測の礎を築いた。こうした先駆的な研究への熱き思い、意義と成果などを含め、さまざまなエピソードを本書から知ることができた。日本の得意とするポーラーパトロール気球観測（PPB）の名付け親が著者であり、その理由が当時はやっていたテレビドラマ「ハイウェーパトロール」から来ていることなどのエピソードも紹介している。また、宇宙線の特徴を生かした宇宙線雪量計の開発など宇宙線応用学といえる分野の開拓話も書かれている。この宇宙線雪量計は、1985年の科学技術庁長官賞を受賞した優れた発明である。

第1次観測隊に参加して以来南極の宇宙線研究を推進していた著者には、第3次隊、第4次隊に参加した理化学研究所宇宙線研究室の後輩の福島紳氏は、研究の将来を託す若き後継者であった。その福島紳氏の南極での不遇の最期は、著者の心に生き続けており、本書では、第一部七話「さようなら、フクシマ」、第二部六話「鎮魂の譜」などに多くページを割いている。また、本書の末尾に「(略) なんとか脱稿までこぎつけることが出来たのは、、、(略)、、故福島隊員への懺悔の気持ち」が後押しをしてくれた」と述べている。

福島隊員の遭難は、著者が「今後も長く続

くであろう南極観測のためには、一つの貴い礎として、いつまでも人々の心の中に生き続けて欲しいと願う」ように、観測隊の安全対策にさまざまに活かされている。また、昭和基地の越冬隊は、福島隊員が行方不明となった10月10日には、福島ケルンで慰霊祭を行い、故人の冥福を祈るとともに、行動への安全の誓いを新たにしている。

また、「ふじ」の就航とともに、防衛庁が南極観測事業に関わるようになったことに対する学界の反応など、一部聞いていたことではあるが、本書でその断片を知ることが出来た。著者の第14次隊隊長の話が幻となるのも、同時に南極の宇宙線にかけた著者の夢が散ったのも、自衛隊問題の後遺症と言えることも知った。第一部九話「激動の中で」で語られていることである。今では想像もできないような南極観測の歴史の一断面である。

著者にとっては、「激動の嵐にただ翻弄されて」、「宇宙線からの撤退は余儀なくされたが南極への情熱まで失ったわけではない」。南極の宇宙線部門は、オーロラ X 線観測に新たな活路を見出した。また、著者は、前述した南極—アイスランド間共役点観測を日米共同観測として実施する等、新たな研究を展開し学界をリードした。

本書は、我が国の南極観測の黎明期、発展期の歴史の貴重な一断面を描き出している他、中学校の同級生である哲学者梅原猛についても語る等、興味ある内容となっている。多くの人に一読を勧めたい。

(国立極地研究所長 藤井理行)



会員のページを設けます。会員の投稿記事、受賞や訃報などを掲載します。

投稿記事は建設的、発展的投稿を望みます。投稿は記事だけの場合2000字以内、写真一枚併用の場合は1600字程度としてください。なお、誹謗中傷等掲載に不適切な記事は編集委員で却下します。不適切な表現や明らかに間違った意見等は投稿者に修正を求めたり編集委員にて修正する場合があります。ご了承ください。

受賞や訃報の情報は本部で把握しきれませんので、各支部幹事、隊次幹事、職場幹事は勤めて

事務局にご連絡ください。

受賞等については、受賞者氏名（隊次、所属）、受賞年月日、功績事項、受賞名称、エピソードなど簡潔に帰してください。

訃報については、物故者氏名（隊次、所属）、読み仮名、逝去の日時をご連絡ください。なお、会報には掲載しませんが、念のため、喪主のお名前もお知らせください。

紙面の都合上編集委員で編集しなす場合があります。ご了承願います。

投稿記事

黒四ダム湖に潜る

大久保 嘉明 （9次越冬・医学）

村山雅美隊長から「南極海での潜水調査に参加せよ」と指令されたのは、1967年11月25日出発の第9次越冬隊員に決定し、寒冷順化の生理学的研究の準備に大忙しの最中だった。生物担当の福井義夫隊員が企画した観測隊初の南極海潜水による海洋生物調査の協力で、彼と潜水ペアを組むことになった。

医学研究隊員としての諸準備の合間を縫って、まず神田の潜水具店で深さ5mのタンクに潜って耳抜き等の基礎を教わり、9月末に真鶴ダイビングセンター（後藤道夫社長）で鶴耀一郎氏に本格的なスキューバ（通称アクアラング）による潜水訓練を受けた。深度35mまで潜って水中カメラ（ニコノス）とムービーカメラでの撮影訓練も行った。

南極海の冷水対策として製作された分厚いネオプレン製ウェットスーツでどの程度の冷たさに耐えられるかテストのため、10月21日富士五湖の本栖湖に潜ったが、深さ18mでも13℃で期待はずれの水温。

更なる冷水を求めて雪のちらつく黒四ダムに出かけたのは、「ふじ」の晴海出港まで20日余りしかない11月2日だった。大町で一泊し、翌3日関西電力黒部ダム管理事務所に赴き、当日は発電機整備中のため取水を止めていることなどの説明を受けた。

インストラクターの鶴氏と福井隊員、小生の3名（写真）は早速ウェットスーツに着替えた。分厚いスーツの浮力が大きいので、鉛のウェイトは6～8kgを必要とした。圧搾空気ポンペを背負うと全装備は35kg位になった。管理事務所から湖底に延びる斜めの階段をつたってダム湖に降りた。両足に大きなフィン（水掻き）を着けているので、時には

後ろ向きになったりして大変な思いで一段一段降りたのを思い出す。



昭和42年10月の黒四ダム

小雪が舞っている天気なので深く潜るに従い暗くなり、数m先を進むインストラクターを見失わないように追従するのがやっと。湖底近くなると、立ったまま湖底に沈んだ針葉樹らしき立ち木が濁った水中に屹立し、幽玄の世界と言おうか、不気味な雰囲気漂わせている。深さ25mで水温6℃、寒さは全く感じない。耐寒テストとしては少し物足りなかったが、30分ほどで潜水訓練を終えた。

勿論この時期、ダムからの放水はしていなかったが、発電用取水口近くでの潜水、しかも潜水能力未知数の素人2名を含む初対面のわれわれに、関西電力はよくぞ潜水許可を与えてくれたものだ。当時の南極観測事業への期待に、今更ながら身が引き締まる思いだ。貴重な寒冷地潜水訓練を終え、寛大な許可に感謝しつつ黒部ダム管理事務所を後にした。

この日本南極観測隊初の潜水は、9次隊が越冬を開始した1968年2月1日に予定された。われわれは昭和基地からラングホブデ沖に待機していた「ふじ」にヘリで移動した。しかし当日は潜水に適した開水面が見当たらず

ず仮泊。翌2日、物々しい海自支援の下、ラングホブデ沿海で福井隊員とのペアで素潜りとスキューバダイビング合計50分間の潜水調査を行った(この潜水本番については後日、稿を改めて報告したい)。
大変なお世話になった村山隊長は、残念ながら南極観測50周年記念式典直前の2006

年11月5日、88歳で他界された。合掌。

参考文献

福井義夫、「ラングホブデに潜る」
極地 7:32-37、(1968)

会員の動向

受賞

「ヒマラヤの東、カリンガルポ山群、踏査と探検史」に対して九州支部支部長松本征夫さんが昨年12月、第9回秩父宮記念山岳賞を受賞されました。(幹事長 坂 翁介)

訃報

平成19年逝去者

竹内武雄	4月 1日	2次夏隊・機械
守田康太郎	7月20日	1次夏隊・気象
佐々木清隆	9月13日	22次越冬・地質

今在義忠	9月19日	4次夏隊・報道
根井 繁	9月25日	21, 22次ふじ艦長
田辺元起	10月 9日	19, 20次ふじ艦長
古賀辰男	11月13日	宗谷1, 2次
根布和博	12月15日	32次越冬・調理
山田保郎	12月23日	宗谷1, 2, 3次

平成20年逝去者

野口良男	1月19日	宗谷1, 2次
佐々木 浩	3月17日	13次越冬・気象
緒方道彦	4月17日	1次夏隊・医療
長谷川禮三	4月20日	6次夏・気象



* * * 広報委員会からのお知らせ * * *

この会報を会員参加型のものとしたいと考えています。予算の都合上ページ数を無制限に増やすことは困難ですが、原稿の字数制限や写真掲載(特にカラー写真の掲載)の制限などがあることをご理解いただき、その制限内で、支部や隊次、職場における南極O.B会に関係した記事をご投稿ください。また、埋め草用のカットや短い記事などもお寄せください。掲載は広報委員の責任で取捨選択、修正依頼などもあることをご了承ください。

なお、「村山雅美さんを偲ぶ」の欄は、「南極倶楽部会報『南極』第23号(平成19年6月21日発行)の村山雅美追悼号」より抜粋して掲載させていただいています。渡辺清規さんの追悼文のタイトルは編集委員会でご変更させていただきました。3回連載予定です。

会報3号で平成19年度分の発行は終わりました。4号からは20年度分の発行になります。

訂正とお詫び : 会報2号付録「役員名簿」2頁運営委員会の「久松武弘」は「久松武宏」の誤りでした。また、会報2号の「連載 支部便り② 茨城支部」の執筆者「青木輝夫」さんのお名前が掲載されておりませんでした。

訂正すると共にお詫びいたします。保存原稿は訂正・修正しました。

決定事項 : 4月24日の運営委員会で、事務局のIT関係担当として「安井和憲(ふじ乗員)」の運営委員就任を決めた。

連載休止の連絡 : 第1号で始めた連載「時は巡り」と「氷海奮戦」は紙面の都合で休んでいます。